コラム

学びをおこす授業づくり

2004．7月

学ぶ意味を自覚させる

「なぜ，人間は学ぶのか」という疑問は，難問ではあるが，人間は自分にとって価値あるものに引かれやすい。本能と言える。しかし，かかわり続けることは，なかなかできない。かかわり続けるためには，外的な支援も大切だが，やはり内面にある堅固な向上意欲や追究意欲が左右する。

学習対象と出会った子どもたちの内面に，「どうして？」「えっ本当？」「早くしたいな。」など，問題意識や憧れを湧き起こさせたい。これらが，「なぜ調べるのか *why* 」「何を調べるのか *what*」「いかに調べるのか *How*」という追究のきっかけや見通しを子どもの側に生起することになる。つまり，子どもにとって，学ぶ意味である学びの必要感・必然性が獲得される。

かかわり合い感を増強させる

「酢で虫が逃げるんだよ」

さらに，この学びの必要感・必然性を追究のエネルギーにし，子どもたちは自分の身の回りの人・モノ・コトに繰り返しかかわったり，事象中の人間や学習仲間との対話をしたりして，新しい価値や多様な価値の獲得・更新をする。このような価値の獲得や更新を経ながら，学習対象の事実や意味をつかむ過程をかかわり合いととらえた。かかわり合いが豊かであればあるほど，問題解決や課題達成に対する満足感や成就感などの学びの喜びは増強されると考える。

「商店街の人にインタビュー」「勉強の内容を大勢の前で発表」など，人とのコミュニケーションが求められる勉強を苦手にし，インターネットで調べる勉強を好む傾向が浮き彫りなった（「首都圏小学校5・6年生1200人 ベネッセ調べ」8月10時事通信）ことを考えると，人とのかかわり方が喫緊の課題になっていることもうなずける。今こそ，人間と人間とのかかわり感のある学びを誘引したいものである。

（芝）